●国際連合大学 2017-2018 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

2017 年 11 月 14 日(火)－11 月 21 日（火）

国　際　連　合　大　学（UNU）
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

●国際連合大学 2017-2018 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

2017 年 11 月 14 日(火)－11 月 21 日（火）

国　際　連　合　大　学（UNU）
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。本事業のもと、同年に日中国交正常化 30 周年を記念した「中国教職員招へいプログラム」が開始され、同大学からの委託を受けて公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、これまでに 1600 名以上の中国の教職員を日本に招へいしてきました。

今回の国際連合大学国際教育交流事業・中国教職員招へいプログラムは、2017 年 11 月 14 日（火）から 21 日（火）の 8 日間にわたり中国の小・中・高等学校の教職員等 29 名を我が国に招へいしました。このプログラムは学校およびその他の教育・文化施設を訪問・見学することにより、日本の教育制度およびその現状についての理解を深め、ひいては、両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。

実施にあたりましては、日本の文部科学省と外務省、中国政府教育部、横浜市教育委員会、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多数の方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2018 年 2 月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目　次

第Ⅰ章　　実施内容

1. 全体プログラム（東京）…… 5
2. 地域受入れプログラム（横浜市）…… 7
3. 全体プログラム（京都）……12

第Ⅱ章　コメントと提案

1. 中国教職員…… 17
2. 受入れ教育委員会…… 25
3. 受入れ校…… 26
4. プログラム主催者・担当者…… 31

付　録

1. 実施要項…… 35
2. プログラム日程…… 37
3. 参加者リスト…… 39
4. 関係機関リスト…… 40
5. 文部科学省講義資料…… 42
6. 過去のプログラム実績…… 45

第I章

実施内容

1.　全体プログラム（東京）

(1) 来日、オリエンテーション

2017-2018 年国際教育交流事業「中国教職員招へいプログラム」により 29 名の訪問団が 2017 年 11 月 14 日（火）に来日した。訪問団は北京、浙江省、四川省、陝西省および中国教育部からの参加者で構成されていた。団長は中国教育部教師工作局処長の黄小華（Huang Xiaohua）氏であった。

訪問団は空港内で昼食をとった後、東京都品川区大崎にあるホテル、ニューオータニイン東京に移動し、オリエンテーションを受けた。プログラム日程の説明や滞在中の注意事項に加え、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）スタッフの紹介があった。訪問団一行は、東京での全体プログラム期間中このホテルに滞在した。

(2) 開会式・歓迎交流会

同日夕方、ニューオータニイン東京「おおとり」にて、夕方 18 時から開会式が行われた。ユネスコ・アジア文化センター人物交流部進藤由美部長が司会・進行を務めた。国際連合大学サステイナビリティ高等研究所 事務局長 古田知美氏、文部科学省大臣官房国際課課長 里見朋香氏、中華人民共和国駐日本国大使館公使参事官 胡志平（Hu Zhiping）氏、中国教職員訪問団団長 黄小華氏が臨席したほか、ACCU からは老川祥一理事、金丸徳雄理事が出席した。

はじめに各関係機関からあいさつがあり、国際連合大学の古田氏は、限られた期間ではあるが、日本の学校教育への理解が進み、更には日本の伝統・文化に触れる良い機会になることを希望すること、この事業を通じて、日本と中国の学校同士、または教職員・生徒との交流が深まるとともに、次世代を担う人材の育成に向けて日中両国の教育の質を高め、両国の相互理解がすすむことを期待している、と述べた。続いて、文部科学省の里見朋香氏からは、日中両国は何千年にも渡り交流を育んできており、両国の関係を持続し発展させるためには、さまざまな分野で対話と交流を積み重ねることが重要であり、特に教育分野での交流は、世代を超えて相互理解を深めるものであり、大きな意義を持っているとのあいさつがあった。中華人民共和国駐日本国大使館教育部の胡志平氏は、日中国交正常化 45 周年の記念すべき年のプログラムであり、人的交流を推進し、両国の相互理解と友好を深める機会にしてほしい、中国教職員はこの大きな役目を担っている、とあいさつを述べた。続いて、中国教職員訪問団を代表し、団長の黄小華氏から、来日できて嬉しく思っていること、中国と日本は長い交流の歴史を持っており、双方の努力で教育交流と連携を拡大し、優秀な人材を育てて友好関係を築くことで両国民の幸せに貢献していくことを願う、と返礼のあいさつがあった。

続いて、文部科学省の里見氏と団長黄小華氏、ACCU の金丸理事と中国教育部の劉文偉（Liu Wenwei）氏との間で記念品が交換された。

記念品交換が終わると、ACCU の老川理事の乾杯の音頭で、食事と歓談がはじまった。初めは中国側、日本側と分かれていたが、会が進むにつれ、お互いが言葉を交わし、交流を図った。途中、2016 年に中国政府日本教職員招へいプログラムに参加した教員が中国の「ジャスミン（茉莉花）」と日本の「さくら」を歌い、訪問団を歓迎した。それに対し、中国教職員側の有志が「大海啊故郷（海よ故郷）」で返し、歌による交流もあった。

歓迎交流会で歌を披露する中国教職員（東京）

(3) 文部科学省表敬訪問

プログラム第 2 日の 11 月 15 日（水）午前、一行は文部科学省を表敬訪問した。

はじめに、大臣官房国際課国際戦略企画室長補佐 土田牧氏があいさつし、今回のプログラムを通じて、日本社会や文化に関して理解を深め、帰国後はそれぞれの学校で紹介し、中国と日本の交流の架け橋になっていただくことを期待している、と述べた。続いて、訪問団団長であり、中国教育部教師工作局長の黄小華氏が、この訪問を嬉しく思うと同時に、2002 年以来中国教職員招へいプログラムが続いていることにも触れ、関係機関に対する感謝の意を述べた。国と国の関係は国民同士のつながりにかかっており、深い絆が結ばれることを願っていることも添えた。

続いて、初等中等教育局国際企画調整室 市川清治氏より「日本の初等中等教育の概要」に関する講義が行われた。学校体系について説明する部分では、最近の傾向である中高一貫校についても触れられた。「次世代の学校・地域」創生プランの実現に向けては、初等中等教育と高等教育が連携し、①教員改革、②学校の組織運営改革、③地域からの学校改革・地域創生、④地域学校協同本部による学校を核とした地域創生の 4 つの柱を中心に、実現に向けて取り組んでいることが示された。

質疑応答の時間では次のような質問が挙げられた。

・義務教育段階の学校における児童・生徒の定員について
・小学校、中学校、高等学校、大学の入学試験について
・生徒募集の方法について
・公立・私立校の教員の給与の違い
・良い児童・生徒を学校に入学させるための方法

正面玄関前での記念撮影（文部科学省）

(4) 桜美林中学校･高等学校訪問

同日の午後、一行は東京都町田市にある桜美林中学校･高等学校を訪問した。同校は、1921 年に中国北京で開設された崇貞学園が前身で、創始者の清水安三氏が日本に帰国した 1946 年に桜美林学園として新たに設立された。現在「陳経綸中学」と名を変えた崇貞学園は桜美林学園の姉妹校となって交流が続いている。「学ぶ目的は立身出世にあるのではなく、広く世界の人々に奉仕するためにある」を意味する「学而事人」を建学の精神として、「キリスト教主義に基づいて、国際的教養人の育成」を目指し、今なお発展し続けている。

到着後、訪問団は校内のカフェで昼食をとった。その後、階上にある会議室に移動し、若井一朗教頭の司会により歓迎セレモニーが行われた。まず、桜美林学園長・桜美林学園理事長の佐藤東洋士氏が歓迎のあいさつを述べた。佐藤氏は北京で生まれ、そこで 4 歳まで過ごしたことが伝えられると、中国教職員から温かい拍手が送られた。同学園に通う 1 万 2 千人の児童・生徒および学生と、北京の陳経綸中学で学ぶ 1 万人とがお互いに切磋琢磨しながらよい教育を目指していることが紹介された。訪問団の先生方にはありのままの日本をみていただき、この視察が大きな成功となるよう祈っていると加えた。

次に、訪問団を代表して周徳勇（Zhou Deyong）氏からあいさつが述べられた。桜美林中学校･高等学校の先生方の温かい歓迎とおもてなしに心より感謝し、この訪問団が中日友好を強化・理解し、手を取り合って中日友好のために努力すること、関

係各位の健康とご家族の成功を祈る言葉が伝えられた。その後、佐藤氏と訪問団団長の黄氏で記念品交換がなされた。

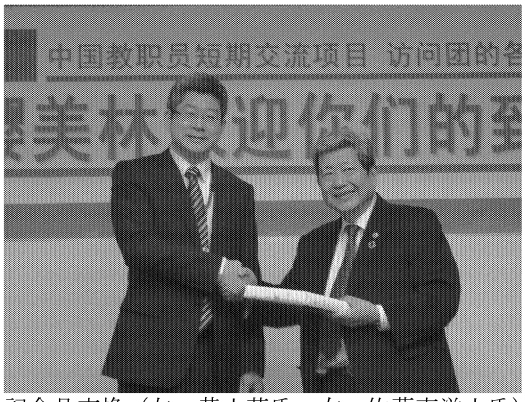
続いて桜美林中学校・高等学校教頭の高橋氏が学校概要を説明した。学校創立から現代にいたるまでの経緯とその教育について主に述べ、中国との交流が長く続いていることも説明された。

その後の授業・部活動見学では 2 つのグループに分かれて校内を回った。最初に剣道場で活動している剣道部の練習風景を見学したあと、中学生の各学年で行われている授業をツアー形式で見学した。いくつかのクラスでは、生徒と中国教職員がお互いに質問をしあう場面があった。生徒からは「中国のクラブ活動」「中国の学校での昼食」「学校の制服」について、教職員からは「好きな科目は」「通学かばんは重いか」「どんな先生が好きか」などの質問があがった。

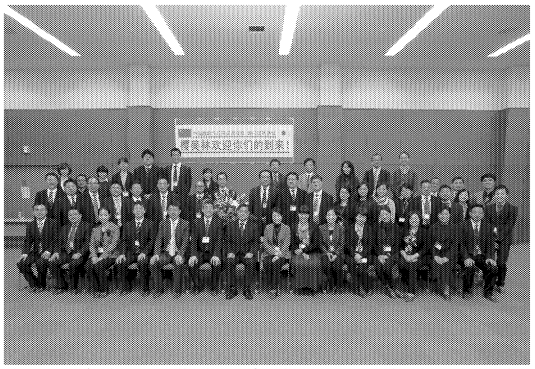
授業見学の後は、教員同士の交流として意見交換会が設けられた。日中の教職員が対面して座り、主に中国側の質問に日本側が答える形式で進められた。この時に出た質問は以下のとおりである。

・生徒の海外研修の費用負担について
・カリキュラムの中に科学はあるか
・教職員の評価について
・授業料が学校収入の多くを占めると思うが、授業料の決定および変更の方法と、そのプロセスについて
・教職員の研修について
・外国籍の教員はいるか。また、採用基準は何か
・生徒の選抜方法
・生徒の健康維持のために、何をしているか。健康や体力の評価は進学の際に影響するか。
・義務教育段階での問題行動には、どのように対応しているか。処罰はあるのか。

最後に集合写真を撮影し、学校訪問を終えた。



記念品交換（左：黄小華氏、右：佐藤東洋士氏）（桜美林中学校・高等学校）


意見交換会後の集合写真（桜美林中学校・高等学校）

2. 地域受入れプログラム（横浜市）

プログラム第 3 日の 11 月 16 日（木）から第 5 日の 11 月 18 日（土）までの 3 日間、訪問団は横浜市教育委員会の受入れにより、横浜市を訪問した。

同市は、東京湾に面し国際貿易港として発展した港都市である。日本最大級の中華街を有し、外国の文化が息づき、多くの観光客が訪れる街である。

(1) 横浜市教育委員会表敬訪問

プログラム第 3 日の 11 月 16 日（木）午前、東京から同市入りした一行は、横浜市教育委員会を表敬訪問した。

はじめに、横浜市教育委員会国際教育課主席指導主事の山義明氏の司会進行のもと、横浜市の教育長である岡田優子氏より、歓迎のあいさつがあった。岡田氏は、今年は日本で 9 年間の義務教育が始まっ

て 70 年という大事な年であり、横浜市として約 27 万人の子どもたちをしっかり育て、子どもたちが国際貢献できるよう育てており、世界を見る力をしっかりつけてほしいと思っていると述べた。そして、長い歴史の中で、中国から学び続け、これからも良い交流ができるよう協力していきましょう、と挨拶を締めくくった。

続いて、訪問団を代表して団長の黄小華氏が、温かく親切な歓迎に感謝を述べるとともに、訪問校で中国教職員が実際に授業をすることについて、良い交流の機会として期待していること、今後も積極的に交流して両国の教育を発展させて行きたいと述べた。

次に、記念品の交換があり、横浜市からは、横浜市の写真集や同市の特別支援学校で手作りした写真立てが一人ひとりに贈呈された。手作りの写真立てについては、岡田氏が自ら検査をし、問題があるものは学校に返却し、どこか良くなかったのか子どもたちが考える機会を与えたと話し、訪問団は熱心に耳を傾けていた。最後に記念撮影をし、横浜市教育委員会を後にした。

横浜市教育長岡田優子氏（前列中央）を囲んで

(2) 日本語支援拠点施設訪問①

続いて、一行は日本語教育支援拠点施設「ひまわり」に場所を移し、横浜市教育委員会国際教育課長甘粕亜矢氏より、同市の教育について説明があった。内容については下記の通りである。

・市立学校の概況
・「第 2 期横浜市教育振興基本計画」
・「重点施策・事業」
　- 児童生徒の個別ニーズに応じた支援
　- 子どもたちの「本物」体験の充実
　- グローバル化に対応した教育の充実
　- 子どもに向き合う時間の確保

続いて、概要説明の後、質疑応答の時間が設けられ、訪問団からは下記の内容について質問が挙がった。

・放課後の学びの場（中学生と対象とした大学生や地域住民等の協力による学習支援）はどこで開催しているのか。
・私立・公立の比率について
・学校設備について
・国際教育について

横浜市の教育について説明を受ける訪問団

(3) 横浜市立南吉田小学校訪問

続いて、一行は横浜市立南吉田小学校を訪問した。同校は、横浜市の国際化に伴い、約半数以上が外国籍や外国につながる児童となっており、日本人の児童数を上回っている。4 人に 1 人が日本語指導を必要としている中で、国籍を越えた交流ができるよう様々な取組みをしているのが特徴である。

到着後、一行は同校の図書室へ案内された。始めに、同校の校長藤本哲夫氏が仲良く学習し、生活している子どもたちの様子をゆっくりご覧いただきたいと歓迎の挨拶を述べた。続いて訪問団を代表して王頴（Wang Ying）氏が答礼をし、これから両者が友好を結び、発展のためにともに努力しましょうと述べ、記念品が贈呈された。

続いて校長の藤本氏より、同校の学校概要について説明があった。外国籍や外国にルーツを持つ児童が急増していること、そのような児童たちへの指導についてなどの説明があった。運動会では児童が 7 ヶ国語でアナウンスを行ったり、こども通訳ボランティアによる防災訓練、子どもパネルディスカッションなど、多くの活動が

紹介された。

給食の時間になると、中国語のできる児童が中国教職員を図書室まで出迎えてくれ、中国教職員は各教室で給食を食べ、子どもたちと交流した。各教室では、子どもたちと「好きな色は何ですか」「好きな動物は何ですか」など話をしながら、積極的に交流をしていた。給食後は、各教室で掃除の様子も見学した。

続いて訪問団は 4 グループに分かれて授業見学をした。保健室、校長室、特別支援教室、給食室、理科室、図工室などの施設のほか、国語や音楽の授業や総合的な学習の時間でものづくりをしている様子、外国語活動、日本語の支援が必要な児童のための国際教室などを見学した。

各グループが図書室に戻ると、意見交換会が行われ、中国教職員からは下記のような質問が挙がった。

・特別支援学級などに通う児童とその保護者との関わり
・学力テストの頻度について
・学年間の給食のメニューや量の違いについて
・栄養士の有無について

国際教室を見学する訪問団

(4) 日本語支援拠点施設訪問②

一行は、日本語支援拠点施設に戻り、横浜市教育委員会国際教育課劉氏による「学校ガイダンス」を中国語で模擬体験した。同施設は、外国籍等の児童が学校へ入学した後最初の 1 ヶ月間週に 3 回日本語を集中的に勉強したり、日本の学校生活を体験したりして、日本の学校に早くなれるための「プレクラス」を実施している。

「学校ガイダンス」とは、外国籍等の児童が学校へ入学する前に、保護者へ向けた外国語（英語、中国語、タガログ語、韓国・朝鮮語、ベトナム語、ポルトガル語、スペイン語）によるガイダンスである。内容は、写真を中心に、学校生活の様子、学校への持ち物、学校行事などについて丁寧に説明したものである。プログラム内の学校見学だけでは見えてこない学校についての説明でもあったことから、訪問団は非常に高い関心を持って聞いていた。

学校ガイダンスの様子

(5) 歓迎交流会（中華街）

同日の夕方、横浜市の中華街にある「大珍楼」にて横浜市教育委員会主催の歓迎交流会が催された。歓迎交流会には、横浜市教育委員会事務局指導部国際教育等担当部長の奥田裕之氏をはじめとする教育委員会の職員や受入れ校の教職員が多く出席した。

同教育委員会国際教育課の山氏と劉氏による司会で歓迎交流会が始まり、奥田氏による歓迎の挨拶では、中国語での自己紹介から始まり、この会を通して本日の学校訪問などの感想を聞かせてほしいと述べた。続いて、訪問団の黄小華氏が、横浜市訪問中に大いに交流したいと思っていること、そして横浜のみなさまにも中国に是非来てほしい、と返礼を述べた。次に、ACCU 人物交流部の進藤部長より、本事業の重要な要素として、地方自治体になる受け入れがあること、主催である横浜市教育委員会、受入れ校に対し感謝を述べた。そして、受入れ校の横浜市立南吉田小学校校長藤本氏より、横浜では中国と日本の子どもが仲良く素直に育っており、私たちも頑張りましょうと、乾杯の音頭をとり、歓

談が始まった。

円卓を囲んでの歓談では、各テーブルで大いに盛り上がり、あっという間に終わりの時間が近づいた。最後に、横浜市教育委員会指導部国際教育課長の甘粕氏より、訪問団、そして訪問する学校にとってよい国際交流の機会となることを願っていると閉会の挨拶を述べた。

そして、会場で記念撮影をした後、歓迎交流会は終了した。

歓談を楽しむ両国教職員

(6) 横浜市立小机小学校訪問

プログラム第 4 日の 11 月 17 日（金）午前、一行は横浜市立小机小学校を訪問した。同校は「心豊かに学び合い、ともに伸びる子」の育成を目指し、学校教育目標を掲げている。また、地域とのかかわりを持ち、ボランティアと生徒がつながる機会を設け、たくさんのことを子どもに教えている。さらに、マーチングバンドの活動を通じて、北京の小学校との交流もあり、国際交流にも力を入れている。

学校に到着すると、訪問団は図書館に移動した。初めに、校長の田代千佳子氏から中国語で簡単なあいさつがあると、中国教職員から大きな拍手が沸いた。訪問を心待ちにし、お会いできたことを心から幸せに思うと述べた。純粋で大切な宝物である子どもを育て、たくましく生きていくように育てることは国に関係なく、訪問団と同じ使命を担うパートナーであることにも触れた。

その後訪問団一行は 4 つのグループに分かれ、1 年生から 6 年生までの授業風景を見学した。1 年生の「生活」の授業では、体育館で季節の生活の楽しみを学ぶため、どんぐり釣りやどんぐり投げをしている最中で、中国教職員も参加し、得点を競いあった。

休み時間を経て、中国教職員が日本の生徒に授業をする文化授業が行われた。2 年 1 組では黄斌（Huang Bin）氏がスライドに映った風景を生徒に見せ、「ここはどこですか？」と質問することから始まった。生徒は「中国」「万里の長城」と口々に答えた。次にパンダの写真を見せ、「パンダのふるさとはどこですか？」「中国のどこですか？」「パンダを見たことがありますか？」と生徒とやりとりしながら質問は続いた、生徒の手は次々に挙がり、黄氏が当てるのに迷ってしまうほどであった。黄氏は「パンダのふるさとは中国の四川省で、私のふるさとも四川です。パンダをみたことはありません。」と説明した。それからも四川の名所、四川の豆腐料理「雪花豆腐」「孔雀豆腐」「楊梅豆腐」などが紹介された。また生徒から寄せられた「給食はどんな料理ですか？」「運動会はありますか？」「どういう電車がありますか？」を含むたくさんの質問に黄氏は丁寧にひとつずつ答えた。授業の最後に黄氏から中国の小学 4 年生が書いた書の掛け軸が教室に贈られた。

交流授業の後は、体育館で全校生徒による歓迎集会が催された。まず、中国の李玲（Li Ling）氏によるあいさつがあり、小机小学校の生徒を見ていると中国の生徒のことを思いだすと語った。その後の記念品交換では、生徒から千羽鶴が、李氏からは団扇が渡された。そして、全校生徒から中国語と日本語で「となりのトトロ」の合唱がプレゼントされた。中国教職員からは、中国の「让我们荡起双桨（一緒に船を漕ごう）」と日本の「しあわせなら手をたたこう」が披露された。小机小学校の「みんなで踊ろう」（35 周年ダンス）という企画では、生徒の何人かが壇上にいる中国教職員の間に立ち、ステージと会場が一体となり、生徒によって構成されるバンドの演奏に合わせて、生徒と教職員がタオルを振りながら踊った。

お昼には、給食を体験した。1 年 3 組で給食をとった藩惠玲（Pan Huiling）氏は、みんな一斉に「いただきます」をして食べ始める前まで生徒に囲まれ、次々と質問を

受けていた。

学校を離れる際には、小机小学校の生徒や教員がバスの停まっている門近くまで見送りに来て、双方とも名残惜しい表情で出発した。

文化授業の様子（横浜市立小机小学校）

(7) 横浜市立日限山中学校訪問

同日午後、訪問団は横浜市立日限山中学校を訪問した。2017 年に創立 40 周年を迎え、「子どもたちにとって、楽しく充実した学びの場」であることを目標に掲げている。横浜にある 140 校ほどある市立中学校の一つで、生徒 360 人、教職員 30 人の小規模学校で、全校生徒の 90%が部活動に所属している。

学校に到着すると、図書館で歓迎セレモニーが行われた。校長の菱刈範之氏は中国語で学校名と校長名を述べ、加えて歓迎の言葉を贈った。続いて、同氏により学校紹介と当日の訪問の流れが説明された。学校の行事と時期、クラブ活動に加え、唯一横浜で実施している「教科教育」に触れられた。同校では教科ごとに生徒が教室に移動し、先生はそのまま教室に留まる形式で運営されていることや、お弁当を家から持ってこられない場合には、「ハマ弁」と呼ばれる昼食を選択できること、活発なクラブ活動について紹介した。

続いてクラブ活動の見学に移り、訪問団は 3 つのグループに分かれて見学した。1 つのグループでは 2017 年 5 月に中国政府日本教職員プログラムに参加した島ノ江正浩氏が案内役の一人を務めた。見学は校庭から始まり、中国教職員から「校庭は公立学校では同じ形態ですか？」「砂埃や風の対策はどのようにしていますか？」「なぜこのような校庭を使っていますか？」といった、校庭設備に関する質問が相次いだ。中国では何十年も前は同様の校庭だったが、ほこりの飛散のため避ける傾向があり、現在では樹脂による舗装が採用されているという。

その後、園芸部、吹奏楽部、美術部の活動を見学した。園芸部は校庭脇で農作物を育てており、当日は芋堀りをしていた。吹奏楽部は演奏の練習中で、訪問団が入ると生徒はやや緊張の面持ちとなったが、迫力ある演奏を傍で聴くことができた。美術室では、1 年生の授業での作品を鑑賞し、数名の美術部員が絵を描いている様子を視察した。見学の合間には、クラブ活動がどのように成績に反映されるのかという問いがあった。また、生徒が受験に失敗したら、教員の評価に影響があるかという質問もなされた。

日限山中学校では最後に教員同士の意見交換会が開催された。1 グループにつき中国教職員 4 人、日限山中学校教員 3 人程度の構成で、中国教職員の質問に日限山中学校の教員が答える形式で行われた。主な質問は次のとおりである。

・スポーツに関する部活動が多く見受けられたが、他の教科に関するものはあるか。
・生徒は薄着であるが、普段からそのように教育しているのか。
・教職員はどのように評価されているか。
・教職員の給与は勤務年数に応じて変わるのか。
・教員に論文を書くなどのノルマはあるか。
・他の学校に勤務することは可能か。
・教員はどのような大学を卒業しているか。
・教員免許を取得するのは難しいか。
・教員になりたい人は多いか。
・夏休みは休めるか。
・年間計画について詳しく知りたい。
・文部科学省の講義で、学習指導要領改正において「アクティブラーニング」の紹介があったが、その具体例を教えてほしい。
・中国では授業コンテストで優秀な教師に対する奨励金があるが、日本にもあるか。
・生徒が違う学区に移ることは可能か。
・学校教職員の組合はあるか。
・学校内で教員間の交流はあるか。

教員同士の意見交換会（横浜市立日限山中学校）

(8) 三溪園訪問

プログラム第 5 日の 11 月 18 日（土）の午前、一行は横浜市にある三溪園を訪問した。三溪園は、生糸貿易により財を成した実業家原三溪によって、1906 年に公開され、175,000 ㎡に及ぶ園内には京都や鎌倉などから移築された歴史的に価値の高い建造物が巧みに配置されている。

事務課長吉川利一氏に迎えられ、まず三溪園の概要について説明を受けた。そして、訪問団全員で記念撮影をし、吉川氏より、同園の歴史ある建築物の説明を受けた後、自由時間とし、各々で風情のある場所を探しては写真撮影をして、日本の文化や歴史を親しんだ。

写真撮影を楽しむ中国教職員

(9) 金刀比羅大鷲神社

三溪園の訪問を終え、一行は横浜市にある金比羅大鷲神社の酉の市を見学した。一行は、お祭りの準備で賑わう出店の通りを抜け、金刀比羅大鷲神社を訪問した。同神社は、酉の市のための装飾がされ、お参りをする人々、福運をかき集める縁起物「熊手」を購入する人々で賑わっていた。訪問団は同神社の見学後、各々で自由行動をとり、賑やかに並ぶ出店の味を楽しんだり、名物の熊手が売れた際に沸く、威勢のよい掛け声や手締めなどを見ることができた。

3. 全体プログラム（京都）

(1) 高台寺訪問・茶道体験

プログラム第 6 日の 11 月 19 日（日）午前中、訪問団は高台寺で茶道体験を行った。お茶を点てる様子を見せていただき、お菓子とともに抹茶をいただいた後、代表の 2 名が実際にお茶を点てる体験を行った。2 名が点てたお茶は、それぞれ訪問団長と ACCU 職員に提供された。

茶道体験が終わると、高台寺の中を自由に見学した。この日は、翌日に訪問する京都産業大学で中国語を学んでいる学生 5 名がボランティアとして同行し、お寺でも一緒に話をしながら見学した。紅葉が美しく、訪問団は写真を撮りながら散策を楽しんだ。

茶道体験

(2) 清水寺訪問

高台寺を見学した後、全員で昼食を済ませて清水寺と付近を自由に見学した。ここでも大学生ボランティアを含めて小グループで行動し、お寺の見学やおみくじ、写真撮影や買い物などを自由に楽しんだ。

清水寺見学

(3) 京都教育大学附属桃山中学校訪問

プログラム第 7 日の 11 月 20 日（月）午前中、訪問団は京都教育大学附属桃山中学校を訪問した。同校は国立大学法人京都教育大学の附属学校であり、約 400 名の生徒のうち 45 名が帰国生徒であり、1－2 年次を特設学級で学ぶという特徴を持つ。本プログラムで訪問する唯一の国立学校ということで、その特色や研究活動に参加者の関心が集まった。

学校に到着すると、訪問団は 2 つのグループに分かれて授業を見学した。音楽、美術、理科、数学（帰国生徒の学級）、英語など講義形式の授業と実技科目を取り混ぜた様々な形態の授業を見学することができ、とりわけ帰国生徒の学級では、中国に滞在経験のある生徒と訪問団が中国語で対話をする場面もあった。

その後、教室で歓迎セレモニーが行われた。校長の榊原禎宏氏が「皆さまを本校にお迎えできることを嬉しく存じます。皆さまをお迎えすることで、生徒と教職員が新たな刺激を得ることができると思います」と歓迎の言葉を述べると、訪問団代表の劉昌斌（Liu Changbin）氏が「70 年の歴史を持つ学校を訪問できることを大変光栄に思います。四川にある私の学校にもぜひ訪問していただきたいです」と感謝の意を述べ、訪問団から榊原校長に記念品が贈呈された。

続いて、副校長の佐々木稔氏から学校紹介のプレゼンテーションが行われた。「豊かな感性、輝く個性、拡がる共生」という教育目標および基本方針のもと学校を運営していること、研究活動や特色ある学習活動、学校行事について紹介があった。また、帰国生徒教育として放課後に行っている日本語教室や中国語教室などについても説明がされた。その後、質疑応答が行われ、下記のような質問があがった。

・帰国生徒の学習内容は一般の生徒とどのような違いがあるか。また、帰国生徒に対するサポートはどのように行っているか。
・一般生徒と帰国生徒の入学試験の内容は異なるか。
・生徒の能力を育てるため、学校ではどのようなことを重視しているか。
・教育大学の附属学校としての特色について詳しく教えてほしい。

最後に全員で記念撮影をして、学校を後にした。

集合写真（京都教育大学附属桃山中学校）

(4) 京都産業大学訪問

同日、訪問団は京都産業大学を訪問した。到着すると訪問団は食堂に向かい、大学食堂で食事を摂った。キャンパスは紅葉が美しく、早めに食事を済ませて紅葉を眺めに行く参加者も見られた。

昼食後は図書館ホールに移動し、歓迎セレモニーが行われた。外国語学部アジア言語学科中国語専攻教授の関光世氏から中国語で訪問団を歓迎する挨拶と京都産業大学の紹介があり、大学の成り立ちから 2007 年にノーベル物理学賞を受賞した理学部の益川敏英教授、海外留学生の就職事情にわたるまで、幅広く知ることができた。

その後訪問団は施設見学として、図書館と神山天文台を見学した。図書館では、閲覧室で学生の図書館利用についての説明を受け、その後自動配架装置が実際に動く

様子を見学した。自動配架装置を見るのは全員にとって初めての経験で、動画を撮影する参加者もいた。神山天文台では、大学創設者である荒木俊馬氏の名前を冠した荒木望遠鏡を見せていただきながら、学内で行っている研究や外部の研究機関との協力などについて河北秀世台長からお話を伺った。

見学が終わると、中国語を学んでいる学生との交流会が実施された。7つのグループに分かれて、学生が準備した自己紹介とスピーチの発表を行い、中国教職員がスピーチに対して感想やアドバイスを述べるなどして活発な対話が行われた。1時間ほどの対話の時間を終えると、訪問団を代表して劉海燕（Liu Haiyan）氏から「日本で中国の文化を学んでいる皆さんに会えてとても嬉しいです。温かいおもてなしに感謝するとともに、皆さんの学業がうまくいくことを祈っています」と感謝の挨拶と激励を述べ、記念品を贈呈すると、それを受けて、学生代表からも中国語で挨拶が行われた。最後に全員で記念撮影をし、交流会が終了した。

交流会が終わると、訪問団はバスに乗り大学の近くにある国際交流会館（留学生寮）を見学した。実際に使われている部屋や共同スペース等を回り、中国を含む海外の留学生の生活と学びを垣間見る機会を持つことができた。

盛りだくさんの日程を終えて、最後の学校訪問を終えた。

中国語専攻教授の関氏による学校紹介